

# 広報福島

発行 福島地区小学校長会

責任者 会長 岩 下 聡

編集 同 広 報 部



【巻 頭 言】

## 思いがけない再会が教えてくれたこと

福島市立福島第三小学校長 佐藤 秀美

この夏、福島大学の学生に講話をする機会を2度頂戴しました。1つは4年生の教員志願者を対象とする「教員関係ガイダンス」での90分の講話です。対面形式で約80名の学生に教職に就く心構えのようなことを話したのですが、全員教員採用の一次試験を受けている学生でしたから、若者たちの真剣な眼差しに頼もしさを感じました。もう1つは1年生237名対象の「キャリア形成論」という授業です。これから自分の進路を決める学生に40分ほど教職の魅力について話すという内容でしたが、オンデマンド型オンラインでの講話ということでしたので、事前に福大の中村恵子先生がiPadで撮影、YouTube限定公開で学生が視聴するというものでした。誰もいない部屋でiPadに向かい、教職の魅力について自分なりの考えや思いを伝えました。少々不安を抱えながら……。

後日、中村先生が学生237名の感想を送っていただきました。驚いたのは全員がしっかりと自分の思いを綴っていたことです。真面目な姿勢に感心するとともに、オンラインでも思いは伝わるということを学びました。その中で、思いがけない再会がありました。私が新任校長として矢吹町の三神小学校にお世話になっていたときの子どもが福大の1年生にいたのです。そのことに気づいたのは次の感想を読んだ時でした。

私は震災当時、実際に、佐藤先生が校長を務める小学校に通っていました。震災後、佐藤校長先生は児童を元気づけるために教材の表紙モデルを募集したり、算数の授業では補助を担当していただきました。「学校は復興の最大の拠点」とありましたが、震災当時、学校に行き友達に会うという当たり前のことにどれほど救われていたのかわかりません。矢吹町は、断水し、通れる状態でない道路も沢山あった中、児童が登校できるように環境を整えて下さった先生方には感謝しかありません。私はその後、復興支援活動に参加しました。当時の先生方の姿を見ていたこと、また震災についてのお話を何度も聞いていたことが大きく関わっていたことは間違いないと思います。困難に立ち向かう大人の姿は、確かに子供たちに影響を与えます。

私は幼稚園教諭志望ですが、震災当時の先生方のように身近で児童のことを考え、支え、守ることができる教員になりたいと改めて感じました。

懐かしさとともに喜びが湧き上がってきました。私は講話の中で、東日本大震災とそれに伴う原子力災害がもたらした被害、避難指示を受けた12市町村の学校の状況、そして困難な中であって前を向く若者の姿を紹介したのですが、それを受けての感想でした。残念ながら個人情報保護の観点から名前を聞くことはできませんでしたが、発災当時は3年生ぐらいたったのでしょうか。それでも子どもたちを守ろうとする教員の姿は、確かにそれぞれの心に刻まれていたのです。

この感想は2つのことを示唆してくれました。

- 困難な時こそ、人として大切なことを学ぶチャンスがあること
- 困難に立ち向かう大人の姿が子どもの生き方に大きな影響を与えること

今、学校は「新型コロナウイルス感染症」という脅威に襲われています。だからこそ私たち教員の生き様が問われているのではないかと、そう思います。

ご存じのように、本県小学校教員の採用試験の倍率は今年度が1.6倍、昨年度と一昨年度が1.7倍という状況です。これは教職を志す若者が減少していることの表れです。もちろん少子化ということもあるでしょうが、「学校はブラック」というイメージが浸透していることも理由の1つです。それは237名の感想の中にもありました。教職を志し、教員免許を取得する若者が増えない限り、現在の大きな課題である講師不足も解消しません。私たちは子どもたちに「教育は未来を創る仕事、教職は魅力ある職業」ということをこれからも後ろ姿で示し、憧れを抱かせる存在でなければなりません。また、学校の働き方改革も、「やれることは既にやっている。これ以上は無理」と思考停止に陥ることなく、知恵を絞り不断の努力を重ねていくことが不可欠です。

思いがけない素敵な再会が改めて大切なことを教えてくれました。

## 【 提 言 】

## バックキャスト思考と「SDGs」

川俣町教育委員会教育長 佐久間 裕晴

年のせいで眠りが浅いのか、目覚めが早く、枕元にある携帯ラジオのスイッチを入れてしまうのが習慣になって久しい。8月下旬、NHK「ラジオ深夜便」の「明日への言葉」をぼーっと聴いていると、聞き覚えのある声と話の内容に、もしかすると一気に目覚めた。アナウンサーとの対談相手は、東北大学名誉教授 石田秀輝氏であった。

お会いしたのは、約10年前、理科教員を対象にした研修会だった。講話の演題は確か「ネイチャー・テクノロジーの創成」だったかと思う。掻い摘んで言うと、これからの社会の中で、人が心豊かに暮らすために必要なテクノロジーを、自然の中から見つけ出して、リ・デザインしていくという話だった。例をあげ、清掃に使われる水の使用量を大幅に削減させるために、いつもピカピカしているカタツムリの殻の構造に着目し、汚れにくい建造物や便器を開発したこと。ヤモリが天井を平気で歩くことができる足裏の構造からあらゆるものに利用される接着技術を開発したこと。また、節電社会を見据え、温度が常に一定な白アリの巣からヒントを得て無電源エアコンを製品化したことなど、わくわく感が半端ない話であった。

そして、石田氏は続けて、この先地球環境を維持し、持続可能な社会とするためには、これまで以上に様々な制限を強いられることになる。それでも人々が豊かに暮らすためには、まず、どんな社会になるかを予測し、一人一人が「バックキャスト思考」を身に付けて、今を行動に起こすことが大切になると力説し、その講話を締めた。講演の後、控え室で、いろいろ教えていただいたが、石田氏は、これからの教育の場こそ「バックキャスト思考」を積極的に導入していかねばならないことを説いた。

では、バックキャスト思考とは何か。一言で言えば、バックキャストの対になるのはフォアキャストである。「フォアキャストとは、過去や現在のデータから未来を予測する手法」を言う。一方、「バック

キャストとは、未来の目標や望ましい状況から現在の解決策を考えていく手法」を言う。物事を考えていくとき、どちらも大切な考え方・手法であるが、概して学校教育に限れば、指導する教師にも、バックキャスト的思考のさせ方の理解やゴール（目標・目的）の持たせ方、期待する子どもの姿など意識して検討する試みが足りなかった感があったと思う。子どもの主体性を念頭に置きながらも、形だけの問題解決的な学習になってはいなかったか。生活科の黎明期に「活動あって学びなし」と批判された記憶がよぎる。石田先生は、これからの社会において学校教育においても固定概念を見直す、いわゆるパラダイム・シフトの必要性を説いていたのだと思う。

さて、「SDGs」の取り組みは、行政、民間のみならず学校においても、喫緊の課題である。最近、テレビや新聞等でも様々な学校の取り組みが紹介され、参考になることも多い。しかし、果たしてそれらの活動が子ども自身が描くゴールを強く意識した活動となっているのだろうか。伝わってくる情報の範囲だけでは活動の姿は見えても、子どもの主体的な探究過程の姿としては見えてこない。

単発の活動でもよいのではないかとわれればそれまでだが、SDGsをよく理解し、近未来を担う2030年のあるべき社会の姿やそれを阻む課題を可視化し、持続可能な社会を実現するために、今をどう変えていかねばならないか、あるいは、どんな具体的な行動や実生活の中でチャレンジしなければならないのか、みんなで知恵を生み出すというまさに、バックキャスト思考が学校教育の中にも根付かせていくことがこれからは重要だと思っている。

予測困難な社会とは言われるが、どんな社会、どんな自分の姿を求めたいのかを自分なりに予測し、どのような視点で物事を捉えていくのか、その道筋は、今求められている「主体的・対話的で深い学び」の実現とまさに符合していると考えます。

## 統合の要は学級活動

福島市立飯野小学校長 齋藤 亮一

本校は今年度から、飯野小、大久保小、青木小の3校が統合され、新生飯野小学校がスタートしました。統合にあたって、子どもたち同士のよりよい人間関係の構築を重要視していかなければならないと考えました。特に、大久保小や青木小の子どもたちは、環境が大きく変わります。飯野小にスクールバスで通わなければなりません。学級が少人数から大人数になり、その大多数が飯野小出身となります。子ども一人一人の不安はかなり大きいと考えます。4月1日の職員会議においても、特に4月は、学級の子どもたちの人間関係が少しでも深まるような活動を多く取り入れるようにと先生方に具体例を交えながら話しました。

第1回職員会議から数日たって、研修主任が私のところに来て、「校長先生、今年度の現職教育は特別活動、特に学級活動(1)を行いたいです。」と言ってきました。先生方全員にアンケートを取ると、ほとんどの先生方が同様の思いでした。

学級活動(1)は、豊かな人間性や社会性を育むことをねらいとし、特質である自発的、自治的な実践活動を積み重ねることにより、子ども一人一人に学級に対する所属感や自己有用感が生まれ、支持的風土のある学級が醸成されます。私も心の中で「学級会をやってもいいかな」と思っていました。胸の中にしまっていたので、研修主任の発言や先生方の思いは驚きでした。先生方も昨年度から統合に向けた準備をあらゆる側面からする中で、何を大切にしていかなければならないのかが見えてきたのでしょう。決して、私が強引に学級活動(1)にしたのではありません。校長の思いと先生方の思いが一致していたのです。

新生飯野小学校がスタートして、1学期が終了しました。子どもたちは学校生活に慣れ、笑顔が増えてきました。今後も、学級活動(1)を基盤に、職員一丸となって、学校や学級に対する所属感や自己有用感を育んでいきたいと思えます。

## 風通しの良い学校に

福島市立鎌田小学校長 関口 和夫

校長は常に判断を求められる立場である。判断するためには、判断するための情報が必要であり、それはあればあるほど良いと感じている。子どものこと、保護者のこと、地域のことなどあれこれと。さらには、同僚である教職員の日々の姿や仕事への思いなども色々と。このような思いから、学校経営を進める上で必要な情報を得たり、教職員とのかかわりを大切にしたりするために以下のようなことを行っている。

○ 3部会制と校務運営委員会の両輪での学校経営  
教育活動の推進に当たっては教職員を3部会に分けて企画提案してもらっている。また学年や学校全体にかかわる学校経営の内容については学年主任等による校務運営委員会で協議している。どちらも毎月行うことで教育活動への参画と情報共有ができるようにしている。特に校務運営委員会では特に内容を決めず、校長が気になっていること、教育課題等について意見を出してもらおうようにしている。先生方の日々の思いや苦労などを聞くこともでき、とても有益だと感じている。

○ 自分の目と耳で直接確認、そして共有  
間接的には色々な情報は入ってくるが、やはり直接の確認が大切だと思っている。そのため、校内での子どもの様子や学習の様子、校外での通学の様子なども積極的に見取るようにしている。自ら校内・校外へ足を運び、知り得た情報を直接担任や担当へ伝えるようにすることで、教職員と情報を共有しながら課題解決に向けての協議や指導の場としている。

新型コロナウイルス対応を含め課題が山積である今だからこそ、教職員が一丸となって学校課題に向かっていく必要がある。教職員が個々の能力を発揮し、意欲的に教育活動を進めていくために、少しでも風通しの良い、働き甲斐のある学校をめざしていきたい。その先に多くの子どもの笑顔が生まれると信じて。



## 学校・家庭・地域が一体となるために

福島市立中野小学校長 白土 勲

中野小学校には、「なかのPTCA」という組織があります。子どもたちが、『自分の良さを知り、自分には何ができるか、自分は何を努力すべきか、そして自分はふるさとのために何をなすべきかを考えることができる人間に成長させる』ことを目標に掲げ、平成28年に設立されました。

PTCAは、Parents Teachers Community Associationの頭文字をとっています。

「なかのPTCA」は、「中野小学校は『地域に支えられる学校』であり、『地域を支える学校』を目指しています」を合言葉に、学校・保護者・地域が一丸となって活動を進めています。

学校近くの「斎藤果樹園」さんが果樹園のリンゴの木、まるごと1本を子どもたちの学びのために貸してくださったり、「染織工房おりをり」さんが繭玉から絹糸にする方法を教えてくださったりと、子どもたちの学びのために御尽力いただいたり、学校行事等の運営に協力をいただいたりしています。

子どもたちは、地域の方々とのふれあいを通して、地域の素晴らしさや学校のために尽力している方々の考え方や理念に触れることができます。さらには、自分が生活している地域に誇りを持つとともに、地域のために自分ができることは何かを本気になって考えようとする姿が見られるようになってきました。

未来を担う子どもたちにとって今大切なことは、できるだけ多くの人とのふれあいを通して、多様な価値観に触れ、自分が生きていく上で大切にしたいと思えることを1つ1つ丁寧に確認していくことではないでしょうか。

中野小学校の子どもたちが、将来にむけて夢と希望を持ち続けられるよう、地域の方々との連携をより一層深めていくことで質の高い教育の実現につなげていけたらと、日々邁進しております。

## 吉井田オリンピック2021

福島市立吉井田小学校長 菅野 信幸

本校は「心の美しい子、深く考える子、明るく元気な子」を教育目標に掲げ、教育活動を展開している。特に、健康教育に関して、昨年度は共に学ぶ(動く・考える・食べる)中で、自分の健康に関しての関心を持ち日常生活につながる実践を組織的に進めてきた。今年度は、教育課程を見直し、「動く」という点に焦点を当てた年間をとおした取り組みを「オリンピック・パラリンピック教育」との関連を図り取り組んでいる。

実践内容としては、これまで実施してきた運動にかかわる行事及び教科時数の記録会を「吉井田オリンピック2021」として関連付け実施する。

- 第1弾「吉井田オリンピック2021」  
(旧名：吉井田小学校大運動会)
- 第2弾「聖火リレーで日本一周マラソン」  
(旧名：持久走記録会)
- 第3弾「みんなで跳ぼう!なわとびオリンピック」  
(旧名：なわとび記録会)
- その他
  - 年間を貫くスローガンの設定：  
「この瞬間は一度だけ、輝け吉井田オリンピック」
  - 「特設コーナー」  
「吉井田オリンピックロード」の設置

実践の成果については、まだ第1弾が終了しただけであるが、その足跡(スローガンや記録等)の常設や、日常的な運動委員会からの運動の呼びかけにより、運動することの心地よさや大切さ、楽しさを感じつつあると思われる。今後も個人・小集団・学級等による運動を効果的に生かせるよう、第2弾・第3弾に取り組んでいきたい。

ただ、この実践をより充実させるためには、「あこがれ(スポーツやアスリートに対する)」をもたせることが必要不可欠である。今年度中に一度は、オリンピック等一流アスリートから学べる場をどうにか設定していきたいと考えている。

## 今こそ「チーム水保」

福島市立水保小学校長 井上 明浩

新型コロナウイルス感染症が収まらない中、本校においても日々、子どもたちと教職員の命を守ることを最優先に考えて教育活動を進めている。

夏季休業前、学期末の忙しい時期だったが、緊急時におけるオンライン授業実施のための準備として、WebexMeetingsの接続の仕方を急遽全校生に指導しなければならなかった。日にちがない中で、全校生にどのように指導するべきか考えていたが、ICTに得意な6年担任が、WebexMeetingsの接続の仕方を理解している自らの学級の子どもたちを、朝の時間や昼休みに引き連れて、一緒に下級生に教えていた。そのことにより、短時間で全校生が接続の仕方を理解することができた。

水保小学校の先生方は、学び合う教師集団である。本校では、「ネクストプラン」と呼ぶ互見授業を行っている。この「ネクストプラン」とは、検証授業を通して見えてきた課題を先生方と共有し、授業者が別な単元等で、その課題の検証を試みる授業のことである。検証授業を1回で終わらせるのではなく、再チャレンジして検証し、よりよい共同研究へとつなげていっている。

本校は、様々な問題を抱えている児童や困り感をもった児童が少なくない学校である。だからこそ、先生方も子どもたちも、「チーム水保」で日々助け合いながら教育活動を進めている。

私は、常々、良好な関係づくりを大切にしている。そのために、朝の登校指導での子どもたちとのあいさつ、日々教室を訪問しての先生方との会話、そして、積極的に地域へ出向いての情報収集を大切にしている。良好な関係づくりが、教育の基盤であると同時に組織力を高めることでもあると思っている。

まだまだ、新型コロナウイルス感染症が収まらないこんな時だからこそ、良好な関係づくりを大切に、「チーム水保」を更に高め、教育活動を進めていきたい。

## 地域とともに

福島市立南向台小学校長 齋藤 秀樹

南向台地区では、地区の青少年健全育成推進会が「みなみっ子夏プロジェクト」と題して、子どもたちへの学習支援を行う「寺子屋なんこう大」や剣道体験の場としての剣道教室、地区の夏祭りに合わせてのお化け屋敷の運営（新型コロナウイルス感染症対策のため令和2・3年度は中止）など、子どもたちがメリハリのある充実した夏休みを送れるように活動してきました。

このプロジェクトは、南向台小学校児童及び南向台地区在住の小学生を対象にして、子どもたちが地域の講師と学びを深めながら、地域への所属感を高めることができるように、地区の青少年健全育成推進会が主催して行っているものです。

夏休み以外にも、地域住民と子どもたちが昔遊びや餅つきなどを通してふれあいながら交流を深める「大人と子どものふれあい遊びのつどい」、小学校の児童会活動「校内オリエンテーリング」への協力、さらには、ミニコンサートやLEDを利用したキャンドル制作等を通して震災からの復興を再認識するつどい「3.11から未来への灯火～2021キャンドルナイト～」など、学校・家庭・地域が一体となって参加できる活動を推進してきました。その中心となっているのが、地区の青少年健全育成推進会であり、そのメンバーは、地域住民、保護者、学校の各代表者です。

こうした子どもたちを地域全体で見守り、育てる活動がしっかりと地域に根ざしているのが南向台地区です。大人も子どもも楽しみながら交流を深め、つながりを持つことが、地域全体で教育を推進する基盤となり、特色となっています。

コロナ禍において、こうした取組が思うようにはいかない現状にあります。しかし、こうした状況だからこそ、改めてその意義を再確認するとともに、南向台地区に育つ子どもたちのために、しっかりと将来につないでいかなければならないと思っています。

## リードのない犬

川俣町立川俣小学校長 本名 武

それは風変わりな犬の散歩であった。犬の主は腰が直角に曲がり、手押し車を懸命に押す老媪。3メートルほど先を行く犬は、老媪が止まると同時に止まり、心配そうに振り返る。老媪は、犬が止まらなくてもいいようにすぐさま握りバーに力を込め懸命に車を進める。同時に止まる老媪と犬、その間のリードがないことに気づいたのは、数日してからのことであった。それは十年ほど前の通勤途中、短いトンネルを抜けて現れる光景。いつものように心配そうに振り返る犬と遅れまいと必死に車を押す姿、ふと琴線に触れる瞬間があった。互いを思い合い、慈しむ気持ちが、二者の間に確かに見えたからか、身内の老媪の姿と重なったからか。

当時、この風変わりな犬の散歩のことを子どもたちに語った。どっちが散歩させてるか分からないとおかしそうに話す子がいた。早く家に帰って自分の犬と散歩したくなかったと話す子もいた。毎朝すてきなワンシーンを見られていいですねと大人びたことを言う子もいた。そう、それは美しい光景だった。

奇しくも現在、あの同じ道を通勤している。心配そうに振り返る賢くかわいいあのリードのない犬と「心配ないよ、心配ないよ」と懸命に手押し車で進む二つの影は、短いトンネルを抜けても、もう見つけられない。ただ、美しい二つの影と互いを思い合う念は、今もこの胸の中に生き続けている。

誰にでもあるであろう見えないリード。それは誰かとの繋がりや絆というものか、誰かへの思いや願いというものか。見えないけれど確かにあるありがたくもあり愛おしくもあるリード。

私自身、半年後に別の意味でリードが外れる。これまで当たり前にあったものがなくなってしまう現実と不安。そんなときこそ、人の根の部分、見えないリードを大事にしたい。私自身、リードのない迷い犬にならないように。

## ダン・タイ・ソンと母リエン

福島市立松川小学校長 小島 英二

40年前、学生だった私は、第10回ショパンコンクール(5年に1回開催)で優勝したばかりのダン・タイ・ソン(ヴェトナム出身)の演奏に出合った。私は、誰が弾いても同じ音が出そうなピアノという楽器が、実は演奏する人によってこんなにも音が違うのだということを初めて知らされた。それほどまでにダン・タイ・ソンの音は繊細でよく響き、自然で極上の美しさだった。

ダン・タイ・ソンは、成長期まではヴェトナム戦争中であり、練習環境は決して恵まれたものではなかった。粗末なピアノで練習できるのはまだよい方で、防空壕の中での紙鍵盤での練習を余儀なくされたそうである。その才能を見だし、伸ばしたのはソンの母リエンであった。ハノイ音楽院のピアノ科教授であったリエンのソンへの指導は、たいへん厳しいものだったようである。しかし厳しいばかりでなく、ピアノについてはあくまでもソンの意欲を大切にするとともに、そのほかのことでも普通の人間としての成長を考えて接していたそうである。母の指導で上達し、ショパンを弾くことが何よりも好きになったソンはその後、モスクワ音楽院の留学中にショパンコンクールでアジア人としては初めて優勝したのだった。

ダン・タイ・ソンの演奏は、今も色褪せることなく常に私の傍らにある。ピアニストとしての可能性を見だし育てた母の苦勞に思いを馳せながら演奏を聴くと、自然と涙腺は緩んでくる。母の子どもへの接し方は、ピアノ演奏を追求し続けるダン・タイ・ソンの今の姿に大きな影響を与えているのだろう。同時に、自分が子どもの可能性を見だし、伸ばすことを仕事にさせていただいていることに、責任感とやりがい、感謝の気持ちが幾重にも湧き上がってくるのである。

## 編集後記

編集作業を通し、校長先生お一人一人の学校経営の工夫を知り、また、教育に寄せる強い思いを感じることができました。大変お忙しい中、貴重な玉稿をお寄せいただきありがとうございました。

福島市立水原小学校長 唯木 常晴